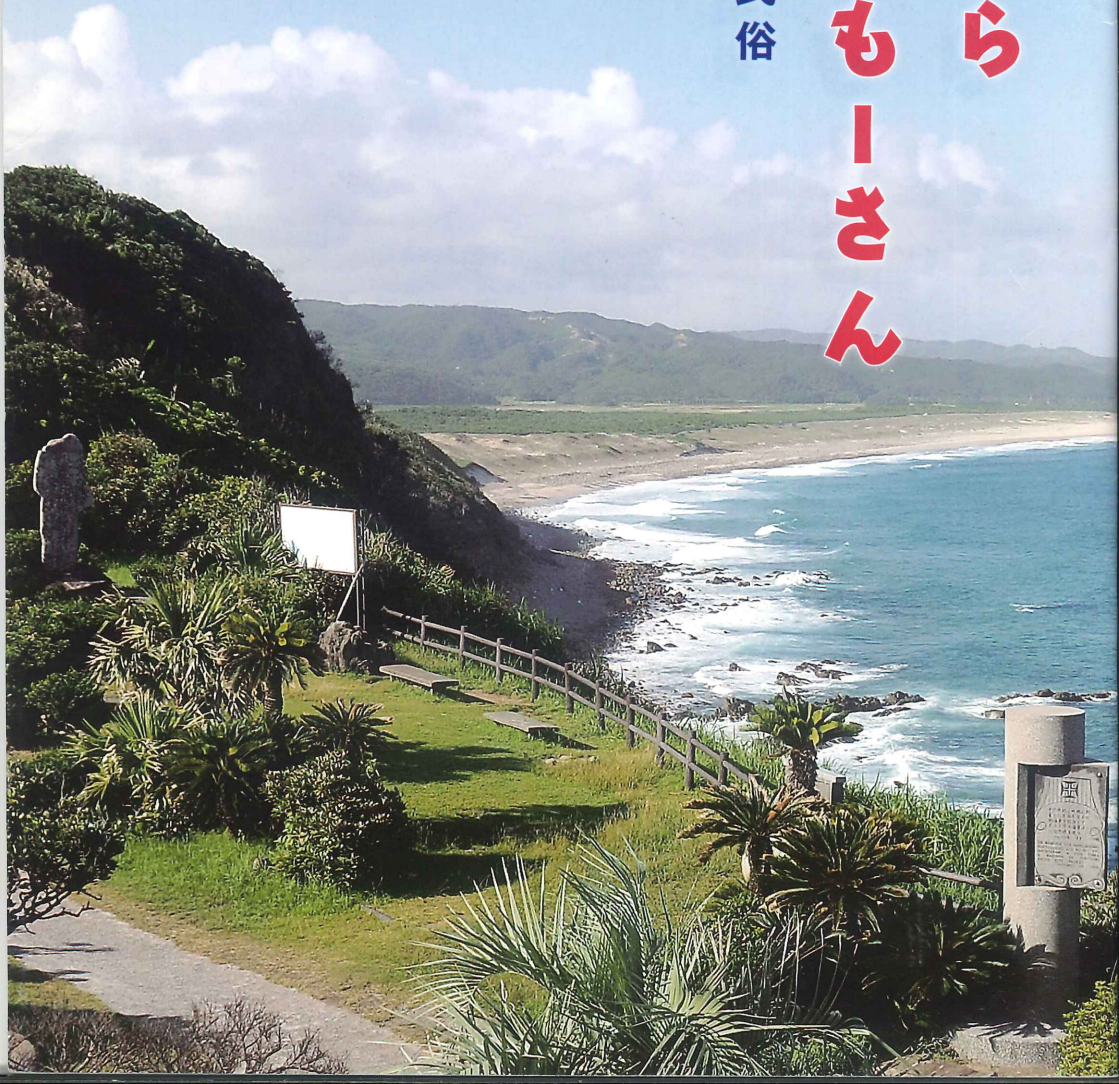


種子島から めっかりもーさん

種子島の歴史と民俗

長浜市長浜城歴史博物館
NAGAHAMA CASTLE HISTORICAL MUSEUM

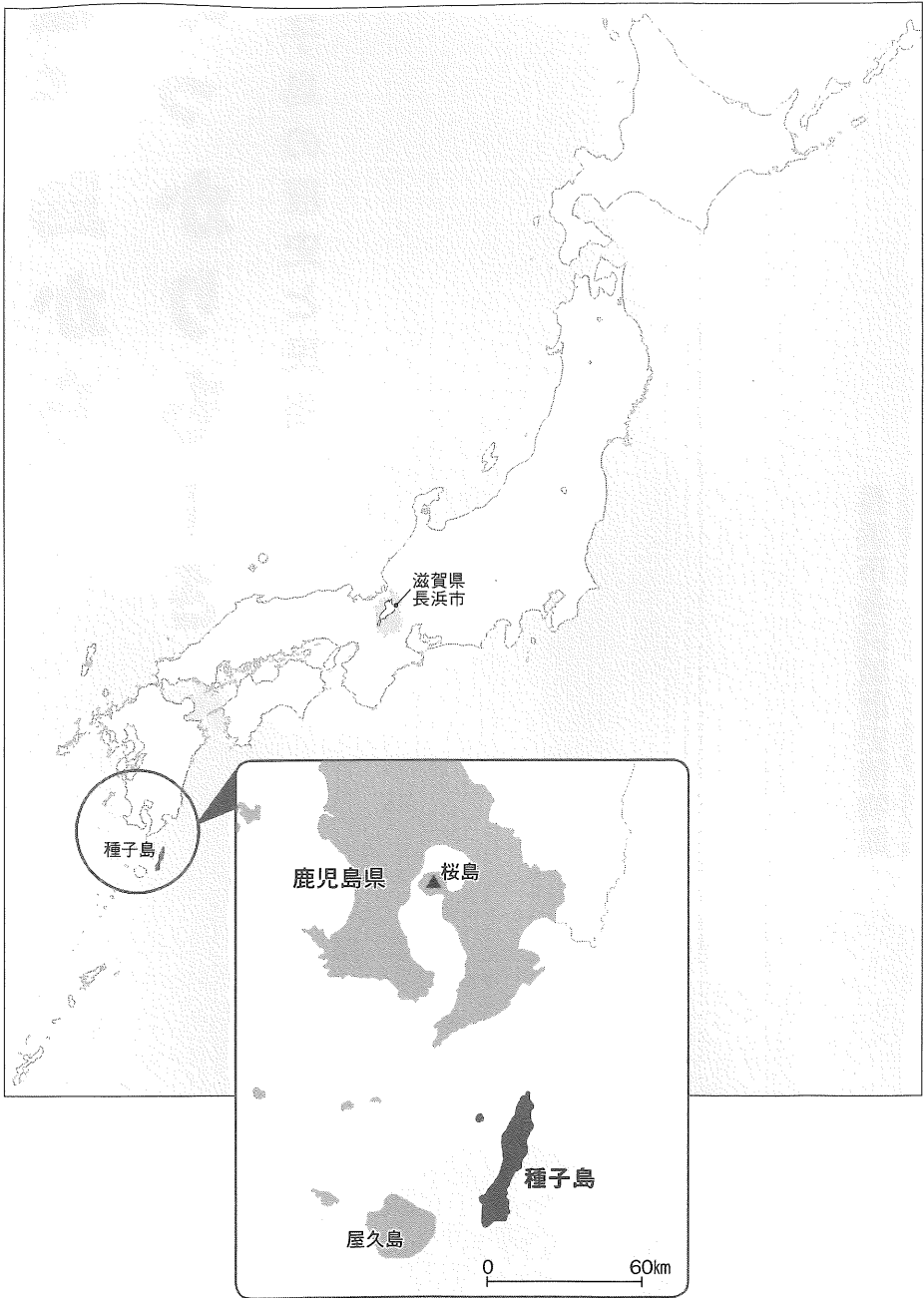


種子島から めっかりもーさん

種子島の歴史と民俗

長浜市長浜城歴史博物館
NAGAHAMA CASTLE HISTORICAL MUSEUM





発刊にあたって

田上美子さん執筆による「種子島からめっかりもーさん」は、長浜城歴史博物館『友の会だより』に連載されました。内容は、単なる種子島の紹介という範疇^{はんちゆう}を超えて、島の民俗誌とすべきものでした。私自身の専門と重なりあうことも多く、大変興味深く拝読させていただきました。記憶に残るのは「島」は、種々の文化の流入によって形成されているという彼女の持論でした。

確かに私たちは「島」を一つの文化エリアに区切って見がちです。それはあたかも島自体が純粹培養されたかの錯覚を抱かせることにつながります。田上さんの連載は、そういった見方に警鐘を乱打したものと私自身は思っています。

どうか田上さんにあつては、これからも「島にあつて島を外から見る目」を存分に発揮していただきたいと思います。それが一年間の研修の成果だと思ふからです。

最後に「あの人は頑張らすっちゃん」という羨望と尊敬をこめて佐世保弁を送らせていただきます。「また逢う日まで。会える日まで」。どうか元気で頑張ってください。

平成二十二年三月

目次

発刊にあたって

I 種子島からめっかりもーさん 田上 美子
種子島の歴史と民俗

- 1 種子島って? 8
- 2 米の子カラ 10
- 3 皆既日食―「月」に一番近い島「種子島」 12
- 4 八月の種子島 14
- 5 山の井様と松寿院 16
- 6 さつまいも(甘藷)にまつわるお話 18
- 7 芸能の島と願成就 20
- 8 来年もよい年でありますように 22
- 9 春を呼ぶ種子島の年中行事 24

- 10 黒糖今昔物語 26
- 11 鉄砲伝来をめぐる人々 28

II 「種子島からめっかりもーさん」に寄せて

種子島と長浜・国友と

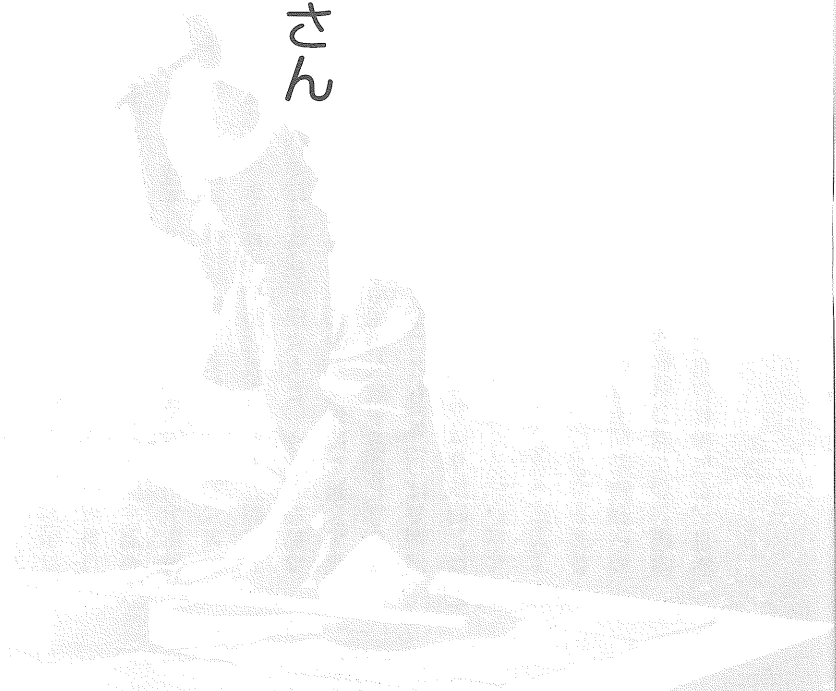
- 種子島からタタラそして国友 中島 誠一 32
- 種子島の民話と刀鍛冶 森岡 榮一 36
- 種子島への鉄砲伝来と国友鍛冶 太田 浩司 40
- 関西人の種子島感 北村 大輔 46
- 南島文化と民俗学 橋本 章 48

編集後記

〔凡例〕

- 一、本書は、長浜城歴史博物館友の会『友の会だより』一一五号（平成二十一年五月一日発刊）から、同『友の会だより』一二五号（平成二十二年三月一日発刊）に掲載した田上美子執筆の「種子島からめっかりもーさん」を編集し直し、一冊にまとめたものである。
- 一、あわせて、同館学芸員が「種子島からめっかりもーさん」に寄せ、長浜と種子島の歴史的關係等について書き下ろした論考を掲載した。
- 一、「めっかりもーさん」とは、種子島の方言で「こんにちは」の意味である。
- 一、第一部の著者の田上美子は、滋賀県長浜市と鹿児島県西之表市（種子島）の友好都市提携に基づき、平成二十一年度、西之表市から長浜市（長浜城歴史博物館）に人事交流派遣職員として在職していた。本書はお互いの地域の歴史・民俗を知ること、両市の友好関係が、さらに発展することを祈念し、企画・編集したものである。

I 種子島からめっかりもーさん 種子島の歴史と民俗



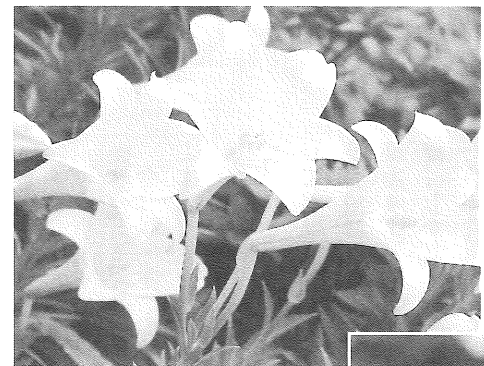
鉄匠 八板金兵衛清定像（西之表市街）



I 種子島って？



浦田海水浴場



テッポウユリ (西之表市の花)



ハイビスカス (西之表市の花木)

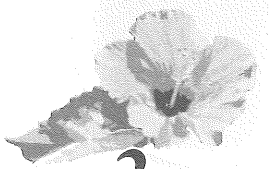
私のふるさと種子島は、鹿児島市から南へ約一五キロメートル、北緯三〇度東経一三〇度に位置した細長く平たい島です。島の面積は四四七・三六平方キロメートル。日本では五番目に大きい島で、お隣に世界遺産で有名な屋久島があります。種子島は一市二町(西之表市・中種子町・南種子町)で構成されています。人口は平成二十一年二月末で西之表市一万七五四二人、種子島全体では三万三一四六人という小さな島です。気候は温暖ではありますが、年間を通して北西の風が非常に強いため船が欠航することも多く、島民の生活に影響を及ぼすこともしばしばです。種子島の観光の目玉といえはやはり鉄砲とロケット発射場でしょうか。

西之表市には種子島開発総合センター(愛称:鉄砲館)があります。南蛮船を模したユニークな建物で、ポルトガル初伝銃、国産第一号銃といわれる伝八板金兵衛清定作火縄銃をはじめ、国内外の古式銃約一〇〇丁など鉄砲資料のほか、自然

歴史、民俗資料も多く展示しています。

ロケット発射場は種子島の南の南種子町にあり、打ち上げ間近になると技術者や報道関係、観光客で島はにぎわいます。天候により延期になることもしょっちゅうありますが、発射されると空にオレンジ色の光が筋をなし、数秒後ゴーという地響きのような音が響き渡ります。

鉄砲伝来の伝播を契機とし、長浜市とは昭和六十二年(一九八七)十月八日に友好都市盟約を締結しました。現在まで教育・文化などの交流を行い、特に毎年長浜出せまつりと種子島鉄砲まつりにはお互いの鉄砲隊が参加し、その地に銃声を轟かせています。今年三月には長浜市少女合唱団「輝らりキッズ」が西之表市を訪れ、介護施設で慰問活動を行ったそうです。これからも様々な交流が続くことを期待します。



2 米のチカラ

今月は「米」のことについてお話ししたいと思います。

種子島では二月から種まきが始まり、三月末まで田植えは終了します。こちらより約二ヶ月早いでしようか。雨期を迎えやすく穂を伸ばし、黄色く色づく七月中旬から下旬にかけて稲刈りは終わり、八月上旬には新米を味わうことができます。しかし、種子島はこの時期台風に見舞われるため、台風発生に戦々恐々とした気持ちで日々をすごします。

赤米のこむ

種子島の南にある南種子町では、七月の中旬には日本一の早場米として全国各地に出荷される様子が毎年報道されます。さてこの南種子町荃永には宝満神社という神社があり、この御田には「赤米」という神米が現在でも栽培されています。大きさは白米より少し小さめ、表面は赤褐色、実は薄赤で、炊くと赤飯のような色になります。粘



玉依姫の舞



苗をもった社人が田植歌に合わせて舞う

(写真転載：HP ふるさと種子島 <http://www.furusato-tanegashima.net/> より)

り気がないため、味はお世辞にもおいしいとは言えません。全国では、荃永と対馬の豆酏と岡山県総社市の三ヶ所で栽培されているようです。今年も四月三日、赤米のお田植え祭りが行われ

た模様です。このお田植え祭りは県の無形文化財に指定されています。校区民はお田植え祭り前日、奉納の旗立てや苗代たて、御田の森の手入れなどを行います。そして当日早朝、森に供物を供え、神事の用意をします。その後ホイドン(神主)がお畦を祓い、森で玉串奉奠を行います。その後、氏子や子供たちが田植歌にあわせ、赤米のお田植え開始です。この田植えは女人禁制です。田植え終了後、「玉依姫の舞」「馬耕舞」「田植舞」「玉依姫への祈願舞」といったお田植舞の奉納が行われます。舟田で社人が苗を持ち田植え歌に合わせて舞います。一連のお田植舞が終わると、赤米の握り飯や煮しめなどで直会をおこないます。

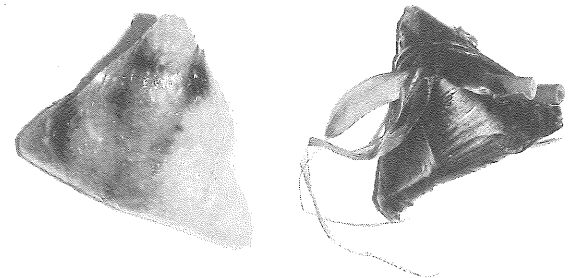
御田の森の近くには「赤米館」という施設があり、赤米に関する資料を展示しています。ちなみにこの校区には種子島宇宙センターがあります。昔からの伝承を地域住民の手で継承しながら、科学技術の最先端の施設もあるという地域なのです。

魔をはらうタコ

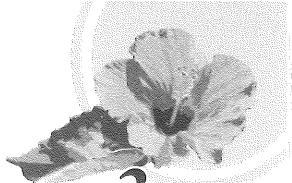
五月の節句には「つのまき」というもち米のダゴ(団子)を作ります。ダチク(学名：ダンチク)

の葉を二枚重ね、三角をつくりそこに灰汁につけもち米を入れ、上手に三角に巻き煮るのを煮ます。出来上がったら砂糖にまぶし食べます。団子に「つの」を作り魔よけとし、それを食することで子供たちの健やかな成長を祈る意味があると考えられます。種子島では、ハレの日にはよく団子や餅を作ります。やはり米のチカラを信じ、米にチカラを授けられることを期待するのでしよう。

こちらの近江米はとても美味であると聞きます。春が訪れ、山から降りてきた雪解け水で育った近江米と、南国の刺すような日差しで育った種子島米をぜひ食べ比べてみてください。



つのまき ダチクの葉で2つの「つの」をつくる

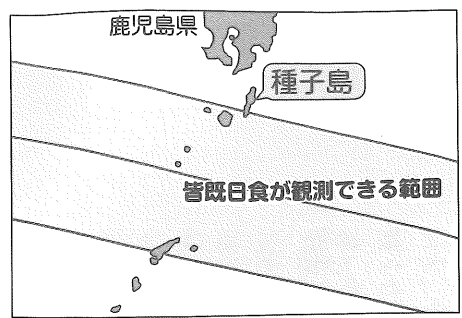


3 皆既日食 — 「月に一番近い島」・種子島 —

天文ショー 皆既日食

みなさんは、今年七月、日本で皆既日食が観測できるのをご存知でしょうか。日食とは、月が太陽の顔を横切るとき、太陽を隠す現象です。

平成二十一年(二〇〇九)七月二十二日、日本では種子島南部(種子島宇宙センター以南)を北限、奄美大島北部を南限とした地域で皆既



皆既日食が観測できる範囲

日食が観測できます。国内で観測できるのは四六年ぶり、次回観測できるのは二六年後であり、さらに今年の日食は、観測できる地域の幅が大きいことから、「今世紀最大の天文ショー」との呼び声が高く、注目が集まっています。

種子島では、天文十二年(一五四三)ポルトガル人が漂着した門倉岬において午前一〇時五〇分ごろから約二分間、種子島宇宙センターでは約一分間、皆

既日食が観測できます。皆既日食が始まると、あたりは夜のように暗くなるそうです。

特に屋久島と奄美大島の間にあるトカラ列島のひとつ、悪石島では最長の約六分間観測できることから、ツアーはすぐに満杯となり、殺到する天文ファンや観光客への対応準備、さらには入島規制が行われるなど、受け入れ準備に追われているようです。

鹿児島県のホームページによると、鹿児島県での観測のメリットは、継続時間が長いこと、梅雨が明けている可能性が高く晴天が見込めること、太陽の高度が高いこと、空気の透明度が高いことが挙げられるそうです。

「今年の夏は種子島」

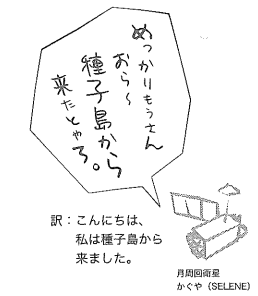
「この機会にぜひ種子島へおじゃりもうせ(いらっしやい)」と言いたいところですが、残念ながら公共交通機関や宿泊施設もすべて予約でいっぱいの状況になっています。そのため地元自

治体では、宿泊場所確保のためテントを張るスペースの提供や体育館開放などの措置を検討しています。

昨年(二〇〇八)から鹿児島県内各地では、皆既日食のプレイイベントとしてさまざま催しが開催されています。種子島宇宙センターでは、星空観察会が行われ、高倍率の望遠鏡で土星や木星、国際宇宙ステーションを観測したことが報告されています。また種子島開発総合センター(鉄砲館)で

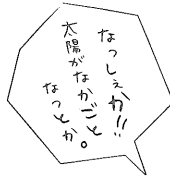
は、六月二十六日から八月二日まで種子島宇宙センターと鹿児島県立博物館の協力を得て、企画展『皆既日食』がやってくる!」を開催します。鉄砲館によると、種子島では三年後の二〇一二年五月二十一日、金冠日食が見えるとのこと。連続して同じ地域で日食が見られるのは非常にめずらしいということです。

今回西之表市では、部分日食しか観測できないのですが(それでも九九%が欠けて太陽が糸のように見えるそうです)、この皆既日食を種子島のサーフィンやスキューバ等のマリッジジャーと組み合わせ、「今年の夏は種子島」としてPRしています。あとは、七月二十二日、台風到来を免



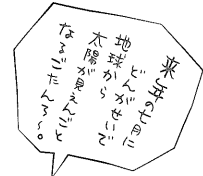
めつかりもったん
おら、
種子島から
来たんや。

訳: こんにちは、私は種子島から来ました。



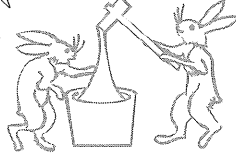
はっしやかい!
太陽がなかく
なかく。
はっしやかい!

訳: どうしてですか、太陽がなくなるのですか。



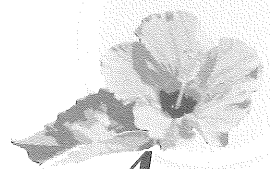
地球から
太陽が
見えなくなる
らしいですよ。

訳: 来年の七月に、私たちのせいで、地球から太陽が見えなくなるらしいですよ。



種子島観光協会ポスター

今年(二〇〇九)は世界天文年。門倉岬に漂着したポルトガル人は種子島に鉄砲を伝え、国友で生産された火縄銃。その国友の鉄砲鍛冶の家に生まれ、反射望遠鏡を自作して江戸時代の科学技術発展に貢献した国友一貫斎。現代の科学技術の最先端である種子島宇宙センターで観測できる皆既日食。ただの偶然なのか必然なのか、何か不思議な縁を感じるの、私だけでしょうか。



4 八月の種子島

精霊様が帰省するお盆

さて今回は、種子島(西之表市)の盆行事をご紹介します。

市街地周辺の地域では、十四日の夜明け前、提灯を下げて精霊様を墓へ迎えに行きます。提灯の灯りで精霊様を先導し、家へ迎えます。他の地域では墓へ迎えに行かず、家の入り口に提灯を下げ、待つところもあります。私の家では、十三日の夕方、墓へ精霊様を迎えに行きます。墓に参り、松の薪で「迎え火」を焚きます。そのおきを持ち、再度家の入り口で「迎え火」を焚き、精霊様をお迎えます。

精霊様への供物は、煮しめやそうめん・ところてん・果物・漬物・さつまいも・黒砂糖・落花生などで、三度の食事を供えます。ある地域では、自分のご先祖様への供物とは他に、帰る家のない精霊をホカジョウヨウと呼び、ホカジョウヨウのために、自分の家の精霊様と同じお膳と箸三膳を

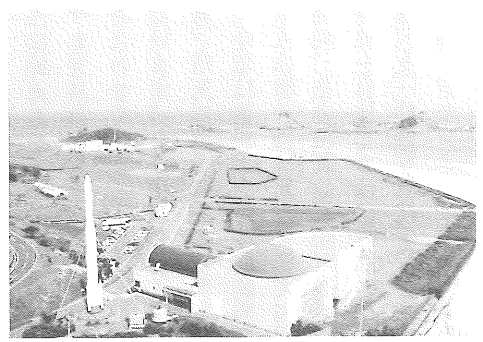
き、またそこで「送り火」を焚き、精霊様を無事に送り届けるのです。帰りにはお土産にナガマキを供えます。

墓地には「迎え火」や「送り火」を焚きに、帰省した親戚たちが集まり、久しぶりに再会します。蟬の声の中、「迎え火」「送り火」の松の煙のにおいが、私にとってはお盆の風景です。

種子島は移民を多く受け入れている島で、度重なる飢饉や災害によって、種子島に耕作の地と生活の糧を求めて、鹿児島から多くの人が移り住みました。現在では西之表市の集落の約三分の一が移住集落です。そのため盆行事のない集落もありますし、移住してきた人たちと種子島の風習が混ざって今日の形になった盆行事もあると思われれます。また、生活スタイルの変化によって、昔ながらの方法はなくなり、盆行事が簡略化されつつあるのも、残念ながら事実です。

夏の一大イベント種子島鉄砲まつり

種子島の八月といえば、毎年、種子島鉄砲まつりが開催されます。南蛮行列や踊り連、友好都市である長浜市の国友鉄砲研究会や大阪府堺市火縄



世界一美しいといわれる「種子島宇宙センター」夏休みには、大勢の帰省客や観光客が訪れる(写真転載: HP ふるさと種子島 <http://www.furusato-tanegashima.net/> より)

供えるそうです。また他の地域では、縁側に水棚を作り、バナナの葉を敷き米や煮しめやそうめんなどを供え、無縁仏を迎えるところもあります。

精霊様が帰る時の舟としてユリの根、槽としてナガマキ(月桃)の葉で包んだ細長い米の粉の団子も供えます。私の家では、精霊様が寝るときのために、枕と布団の形を模した米の粉の団子を作り、お供えます。そして、十五日夕方墓に行

銃保存会、本市の種子島火縄銃隊の演舞が披露されます。三つの鉄砲隊が行う演舞はいっつもものすごい迫力です。火縄銃の銃声は耳だけでなく、体全体に重く響く迫力の轟音です。夜は花火大会が盛大に開催され、西之表市の夏の一大イベントになっています。機会があれば、ぜひご参加ください。



毎年恒例「種子島鉄砲まつり」



5 山の井様と松寿院

生き人形・山の井様

種子島開発総合センター(通称・鉄砲館)には、「山の井様」と呼ばれる人形が展示されています。これは種子島家に代々伝わるもので、江戸時代、島津家が徳川家から賜り、その後、薩摩藩主・島津斉宣二女の於隣(後の松寿院)が第二十三代島主・種子島久道に輿入れの際、伝わったといわれているもので、市の指定文化財です。

端正な顔立ちの等身大の人形で白い手を膝に揃え、端然と座っており、今にも話し出しそうな様子です。鉄砲館によると、山の井様は「生き人形」として大切に扱われており、

季節ごとにお召し替えをさせ、その際、男性が見たり触れたりすると目が見えなくなるとの言い伝えがあることから、山の井様のお召し替えは女性の仕事でした。現在は足の部分の傷みが



山の井様
(種子島時邦氏所蔵)

かってしまうため、松寿院は家臣に命じ薩摩へ治水の研究に赴かせ、工事を行っています。安政四年(一八五七)一月から春の農繁期を除き十月まで、役夫約一万二〇〇名、費用八五両(手許金)を費やし、治水工事を完了させています。

塩田開発については、製塩の技術改良のため、鹿児島本土より技術者を招き、苦心の末、文久元年(一八六一)冬、約三町八反の大塩田を完成させ、島内の自給はもろろん、屋久島の分も賄っていたようです。

種子島の海岸は、単調で屈曲が少なく季節風も強いため、種子島沖で難破する船が多く、港湾修築は島主代々の悲願であったようです。島の財政が安定したころ、松寿院は港湾修築の決意をし、薩摩藩の支援を取り付けるべくその願いを申し出ています。薩摩藩からの調査団を厚くもてなし、薩摩藩より年間三〇〇両四年間の援助を許可されました。船七二〇艘、人夫二万人以上、



松寿院 肖像画
(種子島開発総合センター所蔵)

ひどいことから、冬に内掛けを羽織らせることしかできないとのこと。種子島家の鹿児島屋敷では婦人の部屋に置かれ、春になると磯の花見にも連れ出し、戦時中には、戦火を縫って背負って避難させていたといえます。将軍家から賜った人形を、大切に人間と同じように扱っていたことから、人形に魂が入り、生き人形になったのかもしれない。

女殿様・松寿院

さて、この山の井様を島津家から種子島家へと伝えたのは、先に述べたように薩摩藩主島津家から種子島家に輿入れした於隣で、NHK大河ドラマで有名になった篤姫の伯母にあたる方です。久道死後、松寿院と名乗り、種子島の政治を取り仕切る「女殿様」となりました。松寿院は種子島の島民のため数々の事業に取り組み、特に大規模なものとして、大浦川の川直し、平山塩田の開発、西之表港湾の防波堤修築があります。

大浦川の下流は、満潮時には田畑が海水に浸費用も一二〇両以上、約四年を費やし、文久二年(一八六二)七月悲願であった港湾修築工事が完了しています。石を積んで作られた波止(防波堤)は、度重なる台風にも、破損することなく現存しています。

このほかにも製糖の許可や種子島家墓地の整備、大飢饉の時の手許金の抛出と不作の際の免租など、松寿院は、まさに島民の命と財産を守る施政者であったと思います。余談ですが、英雄色を好むとはこのことか、松寿院は自分の籠を担ぐなどした地元男性を気に入ると、田畑を与えることもあったようです。特に体の大きく筋骨隆々の男性を好んだそうです。現在でも「この土地は松寿院様から賜ったもの」という伝承が残っており、女殿様といわれた松寿院の人間らしい一面を垣間見ることが出来ます。

松寿院の口癖は「女だてらに…」だったようで、松寿院の文章が「種子島家譜」(県指定文化財)に残されています。大きな事業を次々に行つたにも関わらず、このように話す松寿院は、きつと謙虚な人柄であったに違いありません。逆に、このような人柄だったからこそ、島津家や家臣、そして島民に慕われ、様々な事業を成し遂げることができたのだと思います。



6 さつまいも(甘藷)にまつわるお話

秋の味覚イチオシ「安納いも」

しっとり甘い安納いもの焼きいも



いよいよ食欲の秋・収穫の秋に突入しますが、皆さんは「安納いも」(品種名「安納紅」「安納こがね」というさつまいもをご存知ですか。種子島の安納地区等で栽培されていた在来イモの中から育成されたイモで、最近頻繁にテレビなどでも紹介され、注目されています。この安納いも、どうして人気が出ているかというと、一般的に焼きいもはホクホクした食感ですが、この安納いもはしっとりやわらかく、オレンジ色で非常に甘みがあります。収穫後しばらく寒風にさらすと、安納いもの甘みがさらに引き出されます。この甘みを満載して、青果用として、あるいは焼きいもに加工し、冷凍焼きいもとして消費者の皆さんへお届けしています。

現在、安納いもの焼きいもは種子島一押しの特産品で、種子島の地域資源として自治体・農家一体となってブランド化を目指しています。消費者

の期待を裏切らない「ほかほかおいしい安納いも」の提供に努めていますので、機会があれば、ぜひ食べてみてください。安納いもを中心とした青果用さつまいもは、急速に作付面積を増やしており、その他にも菓子類に使用される紫色があざやかな種子島ゴールド、焼酎の原料となるコガネセンガン、デンブ用シロサツマなど、西之表市では一二種のさつまいもが栽培され、さつまいもはサトウキビと並ぶ西之表市の主幹作物のひとつなのです。

さつまいも栽培の成功

種子島・西之表市の市街地から車で一〇分ほど走った西海岸・国道五八号線沿いに「日本甘藷栽培初地之碑」が建っています。碑には「本邦甘藷の栽培は実に我が種子島に創まり、種子島は我が下石寺を以って試作の地と為す。故に題して日本甘

藷栽培初地之碑と曰ふ。初め栖林公、治を図るや、志済民に在り。嘗て琉人より甘藷の利を聞き、折簡して之を求む。元禄十一年戊寅三月中山王尚貞一籠を贈る」とあり、我が国初の甘藷栽培の功績を称えています。「種子島家譜」及び「大日本農史」(農商務省農務局編集)を基に記されたものです。元禄十一年(一六九八)、第十九代島主種子島久基(晩年の号「栖林」)は、飢饉の際の食料として琉球より甘藷を譲り受け、甘藷栽培を家老の西村権右衛門時乗に命じ、時乗は下石寺の大瀬休左衛門に甘藷栽培を命じます。初めてのことで、どのように栽培したらよいかわからない休左衛門つるに実がなると思いながら栽培しましたが、いつまでたつても実がならないため、怒って畑一面に広がったつると葉を引き抜いたところ、土の中からさつまいもが出てきて、大喜びをしたという話が残っています。大瀬家では、現在でもその年に収穫されたさつまいもを休左衛門の墓に供えるそうです。第

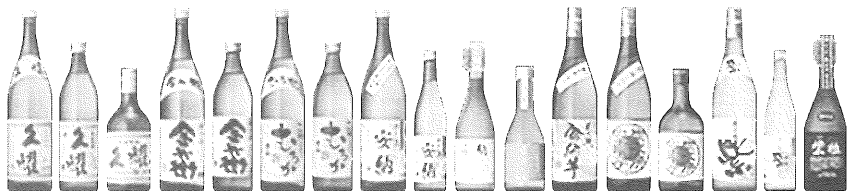
二十三代島主久道正室松寿院は、甘藷栽培を成功させた久基の功績を称え、一八六三年「栖林神社」を建立しました。神社の隣は「御拝塔」とよばれる種子島家代々の墓地や、「大的初式」(県指定文化財)が行われる弓場があり、栖林神社は地元の人たちに身近な神社です。

万能作物さつまいも

冒頭で甘い「安納いも」をご紹介しましたが、辛口党には芋焼酎がお勧めです。種子島には四社の蔵元があり、二一種類の銘柄があります。種子島産のさつまいもを使用しており、イモのにおいの強いものから飲みやすいものまで、好みに応じた多くの銘柄があります。

さつまいもは、食べてよし、飲んでよしの、万能作物なのです。

種子島・西之表市でつくられる本格芋焼酎 勢ぞろい



日本甘藷栽培初地之碑



つまでたつても実がならないため、怒って畑一面に広がったつると葉を引き抜いたところ、土の中からさつまいもが出てきて、大喜びをしたという話が残っています。大瀬家では、現在でもその年に収穫されたさつまいもを休左衛門の墓に供えるそうです。第



7 芸能の島と願成就

種子島のあちらこちらでは、十月から十一月にかけて、集落の神社で秋祭りである「願成就（がんじょうじ・がんじょうじゅ）」が行われます。春にその年の豊作と豊漁・家内安全の願をかけ、秋にその願が成就したことを神様に感謝する行事です。その日は、集落に継承される芸能や相撲が奉納されます。

種子島は「民俗芸能の宝庫」といわれ、たくさん の芸能が伝承されています。日本書紀に「多禰島の人等を飛鳥寺の西の川辺に饗へき。種々の楽を奏しき」とあることから、種子島の人たちがかなり古い時代から、笛や太鼓で歌と踊りを奏で芸能を楽しんでいたことがわかります。また市内の縄文後期の遺跡からは石笛や翡翠の笛が出土されています。

西之表市には一〇の県・市指定文化財とその他多数の民俗芸能が残っており、市では無形民俗文化財保存連絡協議会において、保存と伝承に取り組んでいます。

ここで、代表的な芸能をご紹介します。

種子島大踊り

（鹿児島県指定無形民俗文化財）

現和武部という地域に伝わる芸能で、風本神社の願成就で奉納されます。種子島家は頻繁に京都や大坂と直接往来しており、室町時代、島主が京都に行ったとき関西地方の踊りを家臣に習わせ島に伝え、島の文化と融合しながら今日の形になったといわれます。鉦と太鼓をもった踊り手が内と外で円になり、色とりどりの着物と飾りを身につけ舞っていきます。

花のついた被り物と色とりどりの着物とたすきの衣裳



獅子舞（鹿児島県指定無形民俗文化財）

古田という地域に伝わる芸能で、豊受神社の願成就で奉納されます。明治時代、シイタケ栽培のため大分県から古田に移住した人が伝え、今日に至っています。大太鼓・小太鼓・横笛が囃し立



天狗 VS 獅子の激しい戦い

てる中、獅子と天狗が戦いを繰り返し、最後には獅子が力尽きるといふ流れです。その脇で、子ども扮する獅子方・天狗方の小猿が、道化を演じ観衆の笑いを誘います。この獅子に噛まれると、子どもの無病息災のご利益があるといわれることから、舞の後、獅子に子どもの健康を願う親子の行列ができません。獅子舞の前には、棒と鎌を激しく叩き合う棒踊りが奉納されます。

この地域ではこの日、各家々で自然薯と米粉を使った色とりどりの「かるかん」が作られ、交換したり他の地域から来た人々に歓迎の意味を込めて振る舞います。願成就という日は、神に五穀豊穡を祈り感謝する日であると同時に、村人にとって、酒と

残していきたい民俗芸能

ほかに、兵児踊り・なぎなた踊り・面踊り・棒踊り・ヨンシー踊りなど、さまざまな形態の芸能が伝承されています。これらの芸能も日本全国から移住した人たちがその地域に伝え、地域の文化と融合してその地域の芸能として根付いています。

これらの芸能は、村の願成就だけでなく地域の大きな行事にも披露されます。平成二十年に行われた市制施行五十周年記念事業では芸能大会が開催され、多くの市民がおおらかで優雅、力強く勇壮な芸能を堪能しました。担い手不足、諸道具の維持管理といった経済的な問題もありますが、種子島スローライフの中で、種子島らしい優雅なおらか、かつ勇壮な芸能民俗が伝承され続けることを切に願う、願うだけでなく民俗芸能の継承と保存のため、今何ができるかを考える時期であることを強く感じます。



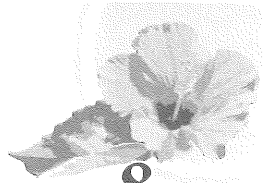
兵児踊り 太鼓と拍子木の音から「トンキヤツキヤー」ともいう



安納棒踊り 棒と鎌で激しくたたき合いテンポが速い



た御で、つちり、わもち、伝具をと、から道歌、沖繩の様子、踊り上げる、ンシーで、作っている、ンで、表現している



8 来年もよい年でありますように

トシトイドンが来るぞ!!

年も押し迫った12月31日夕刻、西之表市国上野木之平のある家に、雨戸を叩いたり奇声を上げながら、騒々しくトシトイドン(トシドン)がやって来ます。手には刀を持ち、恐ろしい形相の子どもを付け、棕櫚の皮を身につけたトシトイドンは、子どもの名を呼び「今年一年おりにこうにしようかー!」「父ちゃんの言う事を聞いていなかー!」などと子どもたちに説教を始めます。また、家族



正座でトシトイドンの説教を聞く子どもたちと、真っ赤の面に腰みのをつけたトシトイドン



帰り際、子どもに年餅を背負わせる

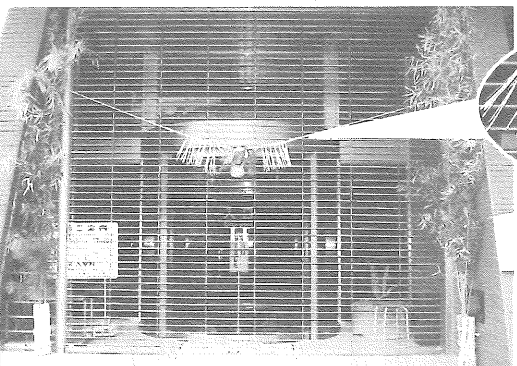
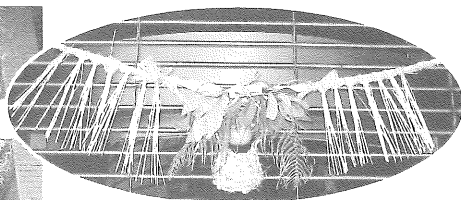
の名前を言わせたり歌わせたり、片足とびをさせたりもします。子どもたちは玄関に正座して、トシトイドンの言うことに神妙な面持ちで返事をしています。最後に子どもに来年もよい子でいるよう約束させ、年餅を置いて帰るのです。

このトシトイドンは下西鞍勇と国上野木之平で行われるもので、明治時代、鹿児島県、甕島から飢饉のため移住してきた人たちがこの地に伝え、現在も行われています。甕島のトシドンは今年九月、ユネスコ無形文化遺産に登録されました。その流れをくむトシドンが種子島でも受け継がれ行われているのです。種子島では、大晦日を「トシトリの晩」といいます。トシトリの晩に来る客人なので「トシトイドン」と呼びます。野木之平のトシトイドンは、子どものいる家の親が集落の男性に依頼します。トシトイドンは下半身がなく、普段は天にいて、大晦日になると首のない馬に乗って天から舞い降りるので、子どもたちは怖くて怖くてたまりません。しかしながら、さ

んざん脅かして帰り際には、お年玉として丸い年餅を置いて帰って行くという一連の流れは来訪神つまり神様なのです。

種子島家の注連縄と門松

上の写真は、元日、開館前の種子島開発総合センター(通称・鉄砲館)に飾られた島主種子島家に伝わる「鶴の巣ごもり」といわれる独特の注連縄です。ウラジロ・ダイダイ・ユズリハを付けた注連縄の下に、茅で編んだ籠を結びつけ、中には丸い餅が入っています。「鶴の巣」の上のダイダイ



1月1日の鉄砲館玄関 独特の注連縄と門木で帰省客を迎えます

イは鶴の卵に見立てています。これは平家敗戦の際、平家の子孫である種子島家の先祖(初代島主信基と思われる)が野宿をし、その頭上の松に鶴が巣を作ったため、雨露をしのぎ快適に過ごせたことから作られるようになったそうです。実際は、ダイダイが落ちることがないよう、茅の籠が受

け皿の役割を果たします。正月に「落ちる」ことを極端に嫌い、縁起を担いだことからきていると思われま

種子島では門松のことをカドキ(門木)といいます。地域によって使う材料や作り方など微妙に

違いますが、門の両脇に立っています。一般的な門松に比べ非常に質素です。一〜三メートルの竹と松・ユズリハ・ウラジロを束ね、それを割った奇数のマテバシイの木で根元を囲み、縄で縛ります。根元には浜でとってきた白砂を山盛りに置きます。これは海の清浄を表します。これらの準備を三十日か三十一日に済ませ、新しい年を迎えるのです。今では、ほとんどの家でしなくなっていますが、元旦早朝、家長である私の父は海岸へ潮井(海水)を汲みに行きます。誰にも会わないよう海岸へ行き、会っても話をしないようにして潮井を汲み、笹で家の中や外に振り撒きます。初日の出を浴びた潮井で清め、新年を迎えるのです。

所変われば新年の迎え方も違いますが、新年がよい年になりますようにと願う人々の心は変わりません。



9 春を呼ぶ種子島の年中行事

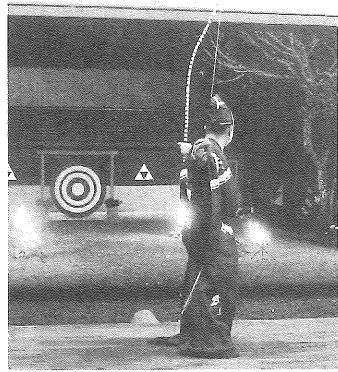
古式ゆかしい**大始式**

「ヤアー」という甲高い声と共に放たれた矢。

一月十一日、三鱗(種子島家紋)の陣幕が張りめぐらされた栖林神社の弓場で、松明が焚かれた厳格な雰囲気の中、本源寺の鐘を合図に、鹿児島県指定無形民俗文化財である「大始式」が執り行われます。その由来は、十二代島主種子島忠時の弓の兄弟子である武田筑後守光長が京都から来島し、宮中で毎年一月十二日に行われていた御始式を文亀元年(一五〇一)より種子島家で行うようになったとされます。

直径約一七五センチの大的を射ることで、悪魔災難を払い清め、島内の平安を祈る儀式です。またこの大始の風にあたり、その年を健康に過ごせるとの言い伝えから、多くの家族連れが見物に訪れます。神主の祝詞や玉串奉奠などの神事のあと、一同は神社本殿から弓場に移ります。大始めがけて六人の射手がかわるがわる合計三六本の

松明が焚かれる弓場で、大始めがけて弓をかまえる



神主・島主など大勢が見守る中、島の安寧を祈る儀式が粛々と執り行われる

矢を放ちますが、三五本までがすべて命中した場合は、「満つれば欠くる」の戒めにより師範役から三六本目に「はずまつしやい」の声がかかり、最後の矢は故意にはずされます。故意にはずされた矢のことを「はずみ矢」といいますが、その昔、はずみ矢をした射手以外の射手は、島主より太刀や馬を賜っていたそうです。現在は金一封とのこと。

この大始式に合わせて、種子島家の菩提寺である法華宗本源寺と日典寺には島内の僧が集まり、十一日夕刻から十三日明け方まで陀羅尼を唱える温座祈念がおこなわれます。「読みあかし」とも言います。

コノミヤジョウをお祝い申す

オコナイの風景の中で餅花の写真を見たとき、この地域にも「コノミヤジョウ(漢字では蚕の宮城)」があるのかなと思いました。一月十四日あるいは十五日に種子島で行われるコノミヤジョウ。養蚕が盛んだった時代は蚕のまつりとして行われ、現在では小正月行事として数ヶ所で行われています。コヤスキの枝に切り餅を刺し、門木や部屋の四隅や柱に飾ります。切り餅を蚕にみたて、あるいは餅をさしたコヤスキの木がしなり、実った稲穂のように見えることから、豊作祈願の意味を表します。

その晩は青年や子どもが集落の家々をまわり玄関先で「お祝い申す お祝い申す これから申すよ 門から申すよ この家 家は裕福 まゆの家と見かけ申すよ ましてこの家は祝うておじやる

どうか 祝い申すよ」とコノミヤジョウの歌を歌い、家々から餅をもらいます。また、種子島の南にある南種子町のコノミヤジョウでは、蚕舞という踊りが行われます。頬かむりで女装した青年が舞い手となり、餅花を持って舞います。また、ひよつとこの面をかぶった芸舞が道化を演じ、周囲を笑わせます。そして来訪を受けた家庭から餅などをもらって帰ります。

これからの季節、種子島では雪が降ることはいくつも風のないよ
く晴れた日は暖
かく、やがて山
桜や野の花が咲
き、一足早い春
が訪れます。小
さな自然の変化
と継承される年
中行事を通じて、
私たちは春の訪
れを感じるこ
とができるのです。



集落の家々の前でコノミヤジョウの歌を歌う子どもたち



黒糖今昔物語

現在、種子島ではサトウキビ出荷の最盛期を迎え、寒風の吹く中、サトウキビ農家は収穫に追われています。種子島では、サトウキビはさつまいもと並ぶ基幹作物の一つで、多くは初夏のころ植え付けを行い、冬に収穫を迎えます。台風の影響を受けるとすぐに倒れてしまいますが、次第に太陽に向かつてまっすぐ伸びていき、ざわざわわと、緑の葉が風に揺れるのです。

昔ながらのさとうすめ

種子島の東海岸北部に位置する伊関沖ヶ浜田集落。サトウキビの収穫が始まると、海岸近くにある砂糖小屋では集落の人たちが黒砂糖づくりを行います。種子島では、サトウキビのことを「オーギ」と言い、黒砂糖を作ることを「さとうすめ・オーギすめ」といいます。昔は集落ごとさとうすめを行っていたようですが、現在では沖ヶ浜田集落のみになっています。

ここで、さとうすめの方法をご紹介します。

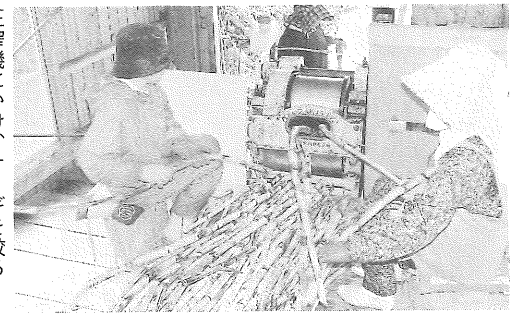
てくれます。出来立てはほのかに温かく、ほどよい自然な甘さがなんとも言えません。

今も昔も黒砂糖

種子島で製糖が始まったのは、文政十年（一八二七）、第二十三代島主久道正室松寿院の功績により、薩摩藩から製糖の許可が出たことに始まります。島主はサトウキビの作付けを奨励しましたが、サトウキビを作っても、島主や藩主が潤うだけで島民には恩恵がなかったことから、島民が大量に生産しようとすることはなかったとのこと。江戸時代、薩摩藩に大きな経済力をもたらした製糖事業ではありましたが、種子島家は島津家と姻戚関係が多かったことから、奄美大島のように厳しく管

葉をとったサト

ウキビを、圧搾機にかけ絞ります。その絞り汁を大きな釜でゆつくりゆつくり煮詰めていきます。不純物やアクを取り除くため、絞り汁に石灰水を混ぜながらゆつくりと攪拌し、



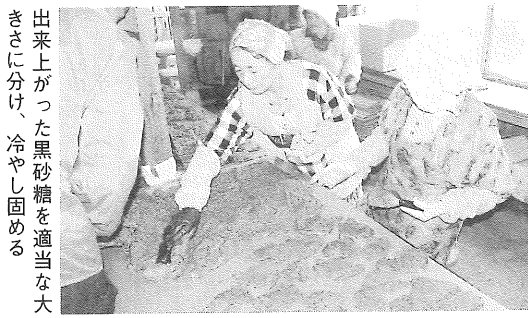
圧搾機にかけ、オーギを絞る

絞り汁が茶色になるまで煮詰めていきます。温度調節や空気を入れるように攪拌するやり方は熟練者のワザです。この時、砂糖小屋の中は、立ち込める湯気と非常に甘い独特な香りに包まれます。その後、煮詰められた黒糖を型に流し込み固まるのを待ちます。また、型に入れず、平たいところにそのまま流し置き冷やしたのも作ります。砂糖小屋へ行くと、出来立ての黒砂糖を食べさせ

理されることはなかったようです。

製糖事業は現在に至るまで、その時代の情勢によって盛衰を繰り返してきました。少し前までは、家族や結による作業で行っていた収穫も、多くが大型機械を用いるようになり、農業形態も様変わりしました。

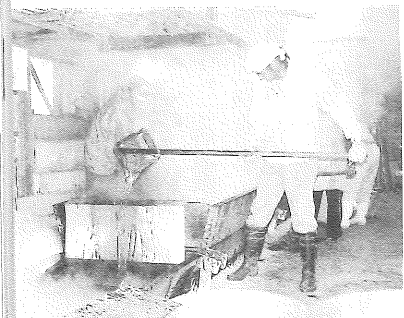
太陽の光を浴びてミネラル分がたくさん含まれた黒砂糖は、鹿児島ではお茶受けの定番メニューです。黒砂糖はそのまま食べるだけでなく、炒った落花生に溶かした黒砂糖をからめて作る豆菓子やふくれ菓子などお菓子に多用されます。また黒砂糖の粉を団子につけて食べたります。鹿児島県が長寿王国なのは、この健康メニューのお陰かもしれません。



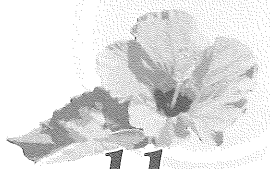
出来上がった黒砂糖を適当な大きさに分け、冷やし固める



混ぜ方には細心の注意をはらいます



オーギの絞り汁を大鍋で煮つめていく作業



11 鉄砲伝来をめぐる人々

鉄砲伝来の地 種子島

「種子島」と聞いて、皆さんは一番始めに何を連想するでしょうか。「鉄砲伝来の地」を想像される方が多いのではないのでしょうか。

鉄砲伝来については、天文十二年（一五四三）

種子島の門倉岬に中国船が漂着し、時の第十四代島主種子島時堯がポルトガル人から火縄銃二挺を譲り受け、それを模した国産銃が島の刀鍛冶の手



種子島時堯公像

によって製作され、その製作技術が国友や堺などに伝播し、急速に全国へ火縄銃が広まったことが、（諸説ありますが）定説となっています。

時堯は国産銃の製作を島の刀鍛冶・八板金兵衛清定に命じますが、どうしても銃身の底を塞ぐネジの製法がわからず国産化は困難を極めていました。そこで、翌年、再来した中国船の乗組員であった鉄砲鍛冶のポルトガル人による製法を習ったことにより、国産化に成功しました。しかしその成功の裏には、八板金兵衛清定の娘である若狭の悲しい伝説が残っています。

若狭ものがたり

島主時堯に火縄銃の製作を命じられた八板金兵衛でしたが、どうしてもネジの切り方がわからず、火縄銃作製は困難を極めていました。その技術を教えてもらう交換条件は、金兵衛の愛娘若狭がポルトガル人の妻になること。若狭は泣く泣くポルトガル人の妻になり異国へと旅立ちます。翌年、

若狭を乗せた中国船が種子島に立ち寄り、乗っていた鉄砲鍛冶のポルトガル人にネジの技術を教わり、国産火縄銃は完成します。若狭はそのまま島に残り、現在は小高い丘にある雲之城墓地に眠っています。

種子島にもあった「三献の茶」

鉄砲伝来を取り巻く人々に、非常に関わりのある「古田御前」という女性があります。鉄砲伝来当時の第十四代島主時堯の側室であり、鉄砲伝来を記す「鉄砲記」を南浦文之にまとめさせた第十六代島主久時の生母です。時堯と古田御前の出会いに次のような逸話が残されています。

時堯が猟に出かけた際、のどが渇いたため、民家に入りお茶を求めました。ひとりの女性が茶碗を鍋の蓋に載せて運んできました。初めは少し熱く、次にやや熱く、次にとても熱いお茶を持ってきたそうです。その女性がのちの古田御前であり、その賢明さに感動した時堯は、古田御前を側室に迎えたということです。この逸話の真偽はわかりませんが、古田御前はわが子を立派な島主にするため、赤尾木城を離れ種子島で一番寒い古田に移

り住み、厳しく教育したということです。武勇に誉れ高い島主久時を育てた賢母として郷土の先人の一人に数えられています。

種子島を故郷とするわたしたちにとっても、種子島は「鉄砲伝来の島」です。

雲之城墓地にある若狭の墓



それ故に長浜市と西之表市の交流は始まり、二十年以上の歳月の中で交流の絆を深めてきました。今後もこの交流は様々な方面で続き、そしてさらなる広がりや祈りながら、「種子島からめっかかりもーさん」を終了させていただきます。この一年間の掲載で少しでも種子島のことを興味を持っていただけたなら、嬉しい限りです。このような機会を与えてくださった皆様方に感謝申し上げます。本当にありがとうございます。



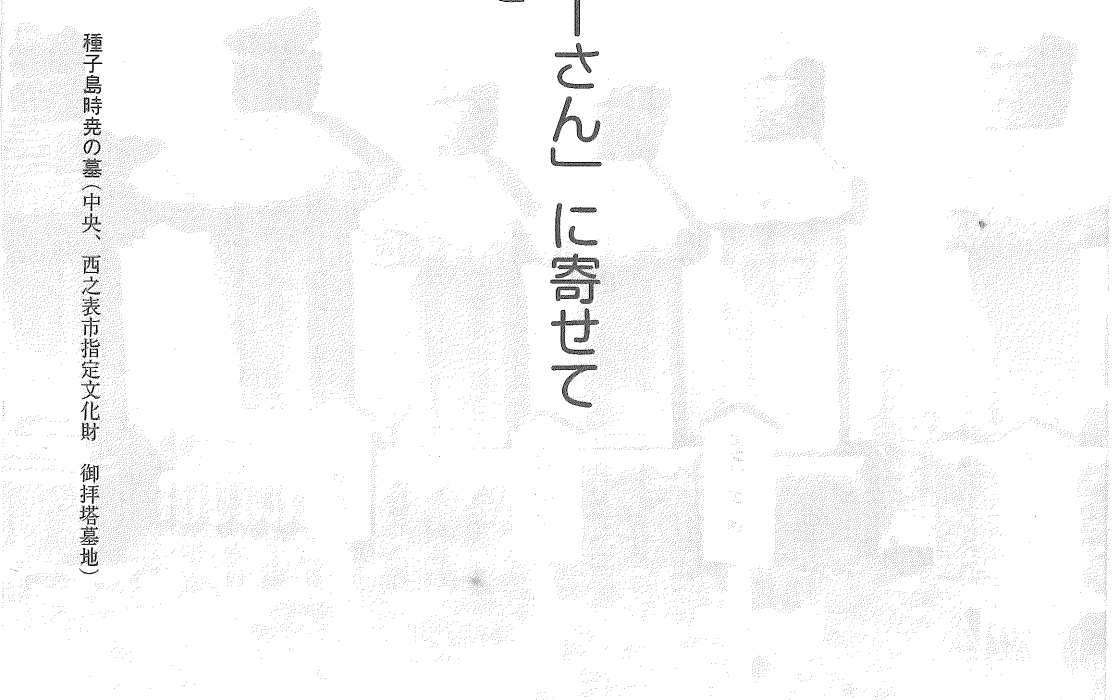
種子島開発総合センター（鉄砲館）



「種子島鉄砲まつり」で西之表市街を行く国友鉄砲研究会（平成19年8月19日）

Ⅱ 「種子島からめっかりもーさん」に寄せて
種子島と長浜・国友と

種子島時尙の墓（中央、西之表市指定文化財 御拝塔墓地）



種子島からタタラそして国友

中島 誠一

(長浜城歴史博物館館長)

昭和六十年年度の特別展は、「国友鉄砲鍛冶―その世界―」であった。私と種子島の出会いもそこから始まる。諸説あるが、我が国への鉄砲の流入を考える際、最初に思い浮かぶのは、種子島であり、特別展示の筋道も自ずから決まった。ただし

鉄鍛冶

種子鉄は、言い伝えによると、鉄砲伝来と同時に中間支店式の、唐鉄が伝来したとも、またそれ以前からあったとも、われています。その製法は、軟鉄に刃鋼を鍛接するツケハカを作りて、日本刀の製作技法をとり入れたものです。鋼を刀にのせ、更へ次第にまわしていくという技法を鉄に適用しています。材料となる鉄は、刀や鉄砲の場合と同じく、幕政時代および明治初期までは、砂鉄から採取しましたが、その後、大正時代までは、馬車や船の金具を適当な寸法にタードリ（鋸取り）しました。これをワモ切りともいい、鉄を製作することより、「こ」までの仕事がいへんでした。現在は、地鉄・鋼とも、本土から購入したものを使用しています。



種子鉄制作のようすと由緒書

「伝ポルトガル初伝銃」が拝借できるかどうかは甚だ不確定であった。色んな方たちに仲介していただき、依頼のために特別展の担当者として最初に渡島したのは、その年の五月ごろだったと思う。そして再び鉄砲ケースを携え、拝借へ渡島したのが十月に入ってからのことであった。展示が終わり、無事にお返しして滋賀に帰るとジングルベルが佳境を迎えていた。

都合、三回の渡島であったが、やはり印象的なのは最初のお願いの時である。拝借とお返しの際は資料が気になって、見学するゆとりなどまったくなかった。ただひたすら重い火縄銃を二挺（鹿児島の川上さんからも関ヶ原の戦いの際に使用された火縄銃を拝借した）ぶら下げて緊張しながら飛行機、船、電車と乗り継いだことしか記憶にはない。

さて種子島で買い求めた鉄は今もデスクに健在である。この鉄は二つに分かれていないので結婚式のプレゼントにもいいと聞き及び購入したが、

その漆黒の肌触りが気に入って私の物になった。漆黒の物というともう一つ、それは島根県仁多郡吉田村の文鎮である。小さな物だがずっしりと重い。これは島根の真砂鉄で作ってある。

賢明な読者はすでに気づかれたことだろう。種子島と吉田村は、国友銃を介在して深い関係があったのである。種子島で受け入れられ、改良された火縄銃はこれまた諸説あるが、近江の国友に伝来し、大量生産が可能となり、それまでの戦法を一変させたのである。その国友に鉄砲鉄を供給したのは、吉田村（正しくは仁多郡上阿井の櫻井氏であるが）周辺のタタラであった。これを発見したのは島根に帰省（妻の実家）したときである。実は特別展開催に際しての大きな疑問は、一つには、なぜ、国友で鉄砲生産がおこなわれるようになったのか（なぜ、国友でなければならなかったのか）。もう一つは原料の鉄はどこから持ってきたのか（買い求めたのか）であった。このことは特別展図録の中で詳述したのでご参照いただければと思う。南の島と中国山地の村を介在した国友鉄砲、まさに鉄の文化交流である。

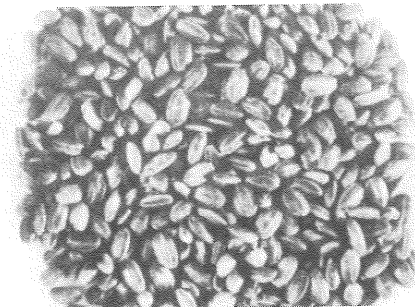


浜辺が真っ黒（砂鉄含有度が高い）の、その名も鉄浜。キムタクが婚前旅行したサーフィンのメッカだそう

追伸

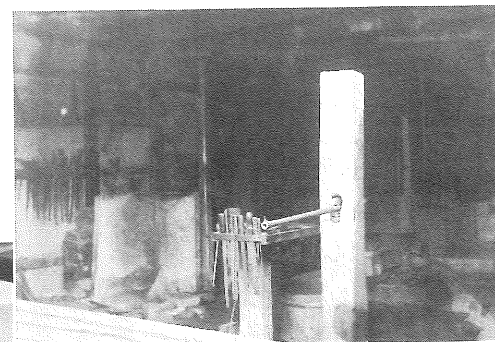
最初の渡島の際には、鉄砲資料館の鮫島さんにご親切にいただいたき、いろいろな場所に連れて行ってもらった。中でも門倉岬と宝満神社は印象的であった。前者はまさに怒濤荒れ狂う岬であり、私の脳裏ではポルトガル船が座礁していた。懸命に写真を撮り、解説図録に掲載し、後には国友鉄砲資料館のパネルにも使っていた。

宝満神社を訪ねたときは、打って変わってよい天気、暑くて半袖が欲しいと思つた。そして神

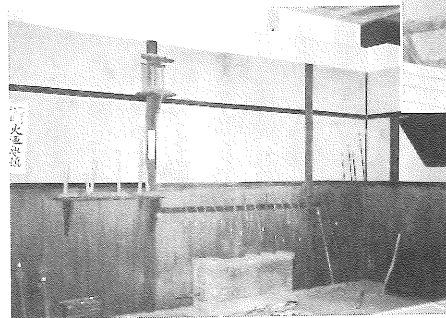


宝満神社の赤米

社の前の御神田には、赤い穂が揺れていた。今こそ赤米は体験学習で使うまでに普及してきてた。が、当時は民俗研究家にとつては赤飯の前身を具体的に示す資料として垂涎の的であつ



国友にあった鍛冶場



特別展の時作った鍛冶場模式構成
このあと国友鉄砲の里資料館で常設展示に移行

た。私も社前に袋に入れて置いてある赤米を賽銭をあげて持ち帰って薫蒸し、収蔵庫に今も保管してある。もちろん、その後、体験学習や弥生時代の展示にも活用したことは言うまでもない。

そしてなんといつても焼酎と魚、前者は三本買って帰り、魚はキビナゴがうまかった。伊勢エビなんかいらぬ。取り立ての新鮮な雑魚、二日と持たない新鮮な魚は、イワシもアジも漁れたてがみなうまい。

後日談

島根からお借りした資料返却は悲惨であった。十二月末、中国道を走っていたら突然の大雪で路面はあつという間に真っ白の世界に早変わり、バンは立ち往生。雪だるまになりながら慌ててチェーンをつけ、国道に降りて宿にたどり着いた。今思えばよくぞ後方から追突されなかったものである。だから宿での地酒伯耆富士は、生きている感謝の格別な味がした。

最後に

メッカリモーさんの思い出は、鮫島さん、そし

て田上さん、おらかな雰囲気とのんびりした語り口「ですよ〜」の独特の伸びが、実は九州佐世保出身の私にとつてこの上なく安心・安全の人間関係なのである。

一年間、島のいろんなお裾分けをいただいていたがとうございました。退職後、必ず行きます。

種子島の民話と刀鍛冶

森岡 榮一

(長浜城歴史博物館副参事)

はじめに

種子島は、民俗の宝庫といわれています。民俗芸能は百余種類もあり。民謡も百余種類にのほり、昔話も三百余話が昭和三十七年(一九六二)までに記録されています。これらの昔話は、語り手の老人が父母や祖父母から口伝えに聞いて記憶していたもので、鹿児島や都(京都)から伝わったものも少なくないと思われます。本土・鹿児島に近いながら、海が荒れると船も飛行機すらも通えなくなる「孤島」であるからこそ、本土では失われた伝承や民話が伝えられてきたのです。本稿では、種子島西之表市に伝えられた民話を考察し、そこで語られた薩摩の刀鍛冶について取り上げます。

一・民話「一平と貧乏神」

むかし、薩摩半島の喜入きいれにぐわんぐわら橋という橋がありました。橋は橋でも、こわれてしまっ

て、渡し舟で渡らなければ鹿児島へは出られないのでした。ところで喜入に一平という刀鍛冶がおりました。この一平はいつしゅうけんめいに働くのですが、どうしたことか、いっこうに貧乏からぬけだせません。そして、どうにもこうにもならないままに、年の暮れになりました。売るものもつかず元旦をむかえた一平は、二日の初商いに刀を売ろうと思ひ、まだ暗いうちに起きて家を出、ぐわんぐわら橋にさしかかりました。

一平がちよど橋のたもとに来たとき、あとから息せききつて走ってくる者がいます。うす暗いなかではつきりとはわかりませんが、見なれぬ小僧がしゃんしゃんと大急ぎで走ってきます。一平は小僧を呼び止めて、たずねました。

「おまやあどけえ行くとか、朝はようからしゃんしゃん走って。」

「おらあ喜入の刀鍛冶、一平の家におる貧乏神じゃ、一平のやつが、どうにもならんから刀を

売るちゆうとつたから、急いでとめに行くところじゃ。あれが分限者になったら、あの家へおりやあならんからな、早まわりして行かんばならん」

と相手が一平とも気づかず、しゃべるのです。

そこで一平はなにげない顔で、

「なしかあそがんことを。一平はわざいよか人間じゃと聞いたとるが、なしかあ貧乏せんばいけんとか」

とたずねました。貧乏神はしたり顔に、

「うん、そらあ一平はよか人間じゃ。じゃがああ婆貴ばき(家内)がどうもいけん。まあ、あの家へ行たて見れ、庭からどこから草はぼうぼう。となり近所とのつきあいもせず、人間の住むような家じゃなか。女が笑い声で話すこともなし、よろうて(一緒に)茶を飲むこともなし、取りきつて掃除すいじをするでなし……、一平は働きもんでよか人間じゃが、婆貴のために貧乏すつとじゃ」と答ました。

「ははあ、そがんもんかな。」

一平は、心ではなるほどとうなずきながら、さりげなく小僧が渡し舟に乗るのを見ずまして、

「しもうた、おらあ忘れもんをした。おまえははようさきい行たてくれえ」

というなり、急いで家に引き返しました。

(中略)大意

一平は家内と共に庭の草をすつかり抜き、箆たすや棚・道具の置き場所を替えて、ほこりをはらい、家内に理由を話して、近所の人々を呼んでお茶をするよう命じてから、急いで出発したのです。

そこに小僧が帰ってきました。が、庭に立ち止まって、不思議そうにあたりを見まわしました。

「家はたしかにこの家じゃが」

とつぶやきながら、家のなかをのぞきましたが、台所からはにぎやかな笑い声や話し声がしていますので、

「やっぱり家をまちごうたける、なかは別の家じゃ、それにわざい人がもようて(たいへん人が集まって)笑うたりしとる」

と言いつて、大急ぎで出て行きました。一平のほうは、急いでおかげで、どうやら二日の市にまにあいました。市の商人が、

「おまえさんな、どういふ(運)のよか人が、

年の晩に来れば十両にしか売れん刀が、きょうは三倍ものねだんで売れる、ほんとうにふのよか人じゃ」

と三十両で買った上に、ごちそうまでしてくれました。

一平は大喜びで喜人にもどり、刀鍛冶としてしだいに名が高くなりました。また、一平の家内も、それからは愛想のよい働き者になって、二人はいくらしをしましたとさ。

話 西之表市小牧 浜田ナツ(七十六歳)

『種子島の民話 第二集』(下野敏見編、一九六二年刊)より

二、刀鍛冶「一平」について

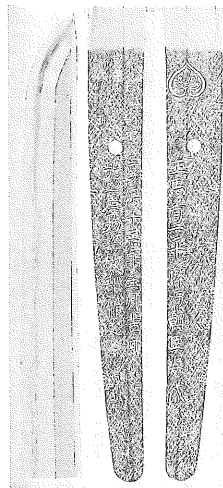
この民話は、主人(一平)の技術がいくら優れていても、家内が働き者で愛想よくなければ、家は繁栄しないという教訓話になっています。しかし、この刀鍛冶「一平」は、実在の鍛冶なのです。

「一平」派の鍛冶は、中村一平安貞(一六五一—一七二七)を始祖としています。安貞は、中村清貞の三男で、薩摩国給黎郡喜人(鹿児島県)に生まれました。領主肝付久兼の命によって波平鍛冶

五十七代大和守安行に入門し、波平・相州両伝の技術を学んでいます。「一平」は安貞の通称名と考えられます。

その長男が、主馬首一平安代(一六八〇—一七二八)です。享保六年(一七二二)幕府の命により出府し、御浜御殿で作刀しました。將軍徳川吉宗から、技倆の優秀さを認められ、茎に一葉の葵紋をきることを許されました。そして帰国途中の京都で「主馬首」に叙任します。これは江戸時代中期以降、停滞していた刀剣鍛冶を活性化しようという吉宗の政策で、安代は期待に応えて、相州伝の沸出来の豪壮な刀を鍛刀しています。賜紋による奨励は、下坂康継に倣ったものですが、安代の場合は一代限りです。

なお子の安代が、父の通称一平を銘に刻んでい



『新版 日本刀講座 第4巻』
所収 押形

るのは、父の通称を継いだというよりも、一平派の意味であると考えられています。そして子の安在、孫の安村も一平を冠しています。

むすびにかえて

種子島の民話に見える鍛冶一平は、一平派鍛冶のうち「主馬首一平安代」のことを伝えていると考えられます。薩摩藩で著名な刀工であった安代の話が、種子島に伝わったものと推定されます。主馬首一平安代は、「天雷一俊居士」と法名して喜入町の傑心寺に眠っています。

種子島への鉄砲伝来と国友鍛冶

太田浩司

(長浜城歴史博物館副参事)

「鉄砲記」に見る鉄砲伝来

薩南学派の学僧・南浦文之なんぽうぶんしの文集『南浦文集』に載る「鉄砲記」には、余りにも有名な大隅国種子島への鉄砲伝来の経緯を以下のように伝える。

天文十二年(一五四三)八月二十五日に、種子島西村(門倉岬)の小浦に大船が漂着した。乗組員は百余人がいたが、その中に明の儒者五峰がいたので、西村の主宰織部丞は筆談して、自らの主君がいる赤尾木に船を曳航することを読み、さらに主君種子島時堯に連絡した。赤尾木には忠首座という文字をよく解する僧がおり、五峰と筆談すると船には「牟良叔舍」と「利志多陀孟太」という商人の長が二人いることを知られるが、彼らはその手に鉄砲を持っていた。時堯はその鉄砲に興味を持ち、九月九日をもってその発射実験を見学した。時堯はその威力に驚き、二人の商人から鉄砲二挺を買い

受け、家臣の篠川小四郎に玉薬の調合方法を学ばせた。さらに翌年、西洋の商人が種子島熊野浦に來たのを幸いに、その中にいた鉄匠から種子島の鍛冶師・金兵衛清定にその製造方法を学ばせ、しばらくして鉄砲の国産に成功した。

この「鉄砲記」は、鉄砲伝来から六十年以上が経過した慶長十一年(一六〇六)に、種子島久時が、父時堯の功績を顕彰するため、南浦文之に依頼して作成したものである。中国船に乗った二人のポルトガル人により、日本へ初めて鉄砲が伝えられたとする一説が含まれている。もちろん、江戸初期まで伝わった鉄砲伝来の伝承を、十分取り入れ編纂されたものだろうが、やはり伝来当時から時間が経っており、必ずしも一等史料とは言えない。しかし、日本における鉄砲伝来の経緯を記した唯一の書物として、その知名度はすこぶる高く、その記述内容は日本人の常識とまでなっている。

「国友鉄砲記」と鉄砲生産

一方、近江国坂田郡国友(長浜市国友町)は、江戸時代に日本を代表する鉄砲生産地と栄えたことで有名である。当地での鉄砲生産の起源は、「国友鉄砲記」と題された文書に記される。現在、鉄砲鍛冶年寄の一家「国友助太夫家」の伝来文書の中に原本が現存し、法量は縦二〇・四センチ、横二一六・七センチで、長大な巻物状の形状をしている。ここでは、種子島への鉄砲伝来から、国友での鉄砲生産に至る記事が見ておこう。

將軍足利義晴が同村の善兵衛・藤九左衛門・兵衛四郎・助太夫らの鍛冶に、鉄砲一挺を見本として渡し製作を依頼したことから始まった。鍛冶たちはネジ式の尾栓の製作方法に苦労したが、八月十二日に至って玉目六匁の鉄砲二挺を完成させ將軍に献上し、その後数多くの鉄砲を献上した。

天文八年(一五三九)八月二十五日、南蛮国の大船が大隅国種子島に漂着した。島の当主の種子島時堯は、船に乗っていた「牟良叔舍」から鉄砲二挺を譲り受け、一挺を薩摩国の島津義久に贈ったが、義久はこの鉄砲を同年十二月二日に將軍足利義晴に献上した。ほどなく、種子島では鍛冶の金兵衛清定が鉄砲製作法を習得して数千挺の鉄砲をつくり、九州から畿内・関東までも広まっていた。一方、近江の国友鍛冶の起源は、天文十三年(一五四四)二月に、

本書の成立は寛永十年(一六三三)十月で、文書の奥には江戸時代に国友鉄砲鍛冶を統括した四人の年寄(大嶋善兵衛・富永徳左衛門・中村兵四郎・脇坂助太夫)の名前が列記されている。宇田川武久氏は、文中に元禄五年(一六九二)刊の『後太平記』の引用があることから、巻末に記された寛永十年の年号は信用できず、実際に編纂されたのは元禄以降であろうと推察する(同『真説 鉄砲伝来』(平凡社新書))。その編纂意図は、国友での鉄砲生産の起源に、末尾に記された四軒の年寄家が関わっていたことを説明することにあった。しかし、山城一国の局地政権となっていた足利將軍家が、戦国大名浅井氏領内の国友村に鉄砲を

同書に記された国友鍛冶の起源は、史実としては信用できるものではない。

ただ、本書が編纂された江戸初期の段階では、種子島家から島津家を経由して將軍に贈られた火縄銃が、種子島への鉄砲伝来の翌年・天文十三年（一五四四）、国友村の鍛冶へ見本として渡され、それが「もと」となって鉄砲生産が始められたと信じられていたことは重要であろう。種子島と国友が「鉄砲」で結ばれていると、江戸時代の国友鍛冶は考えていたのである。

『国朝砲煩権輿録』にみる鉄砲初伝

『国朝砲煩権輿録』という木版刷りの書物がある。国友鉄砲鍛冶の一人、国友戸十郎当栄（号を若拙と言った）の著で、鉄砲や大砲が日本に渡ってきた経緯を考察したものである。書名の「権輿」とは、物事の始めの意味。安永二年（一八五五）仲秋（八月）に、江戸日本橋通二丁目の山城屋佐兵衛（玉山堂）から木版刷りで刊行した表紙共三十丁の冊子である。木下義俊が貞享元年（一六八四）に著した兵法書『武用辨略』の中から、「火矢」と「鉄砲」の項を引用し、それに二行の割注の

形で、戸十郎（若拙）が考察を記した内容である。最後に、附録として南浦文之による「鉄砲記」を全文掲載している。戸十郎家は国友鉄砲鍛冶の平鍛冶の一家で、同家が製作した火縄銃も現存し、当栄（若拙）はその幕末の当主であった。

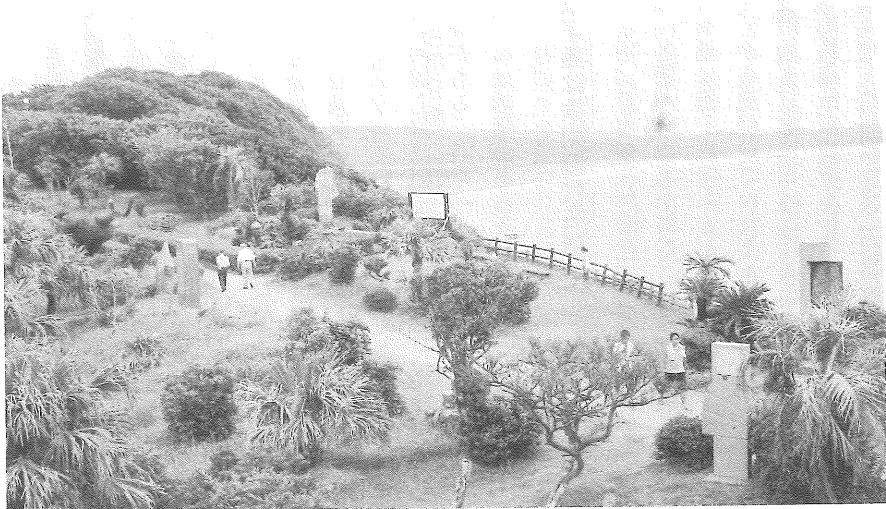
ここで、「鉄砲」の項を紹介しよう。戸十郎は文亀（一五〇一〜〇四）・大永（一五二一〜二八）年間からの鉄砲伝来を木下が説くのに対して、「鉄砲ノ我國ニ伝リ始メタル因来ハ、色々ノ説アレドモ、皆信ジカタクシ、只南浦文集ニ天文癸卯ノ歳、大隈ノ国ノ種子島ニ南蛮ノ大船渡来シテ、始テ鉄砲ヲ伝ヘ教タルト云ハ、正説ニシテ」とある。すなわち、種子島以前の鉄砲伝来説を否定、文亀・大永年間から日本に鉄砲が伝来していたという記述は「妄誕」だと断定する。このように戸十郎の記述は、諸書を学び考察を重ねた結果であり、きわめて論理的である。さらに、「鉄砲記」の引用に当たっては、原本が漢字のみで「初学童蒙」にはわかりにくいので、「和字ノ解釈ヲ加テ」の解説を掲載するとしている。この言葉が象徴するように、本書はほぼ全文に振り仮名が施され、書き下し文による平易な文章で記されている。

この書物により、江戸中期に至っても国友鍛冶たちが、日本での火縄銃の起源が、種子島への伝来にあると考えていたことが知られる。南浦文之の「鉄砲記」を金科玉条とし、そこに記された以前の日本への鉄砲伝来を強く否定する。

鉄砲伝来をめぐる新説

以上、「鉄砲記」や「国友鉄砲記」・『国朝砲煩権輿録』などを紹介し、従来から言われてきた種子島への鉄砲伝来の記事を確認した。いずれも、江戸時代に鉄砲初伝地を種子島とすることは共通しているが、江戸時代に入って遡及的に記されたもので、記述内容については信憑性に欠けることを先に指摘した。

さらに、最近になって日本への鉄砲伝来は種子島のみからではなく、西日本全域に分散的・波状的に伝来したとする宇田川武久氏の説が発表された話題となっている（同『真説 鉄砲伝来』など）。宇田川氏は日本への国外からの伝来銃に近い「南蛮筒」や「異風筒」と呼ばれる銃が、ヨーロッパの火縄銃ではなく、東南アジアの火縄銃に近似している事実を上げ、日本への鉄砲伝来は直接ヨ



種子島鉄砲初伝地（門倉岬）

ロツパからではなく、東南アジアを経由していることを明らかにされた。その上で、当時東アジアで活躍していた倭寇が、東南アジアの火縄銃を日本へ伝えた」と結論したのである。

したがって、鉄砲伝来の年は天文十二年のみではなく、場所も種子島のみには伝わった訳でないと思べられる。鉄砲伝来は一度きり、特定な場所へのみ行われたのではなく、繰り返し場所を変えて伝来した鉄砲が、徐々に日本列島の西から東へ向かって広がっていったと考えたのである。そもそも、四周を海に囲まれた日本で、海外からのある物資がある一回だけ、一ヶ所のみ伝来したと考えるには無理がある。

種子島は鉄砲の代名詞

一方、日本の江戸時代、火縄銃のことを「種子島」と呼んだ事実がある。この事実は、火縄銃の初伝地は種子島であるという觀念が、日本人には早くから根付いていたことがわかる。同じく、国友鍛冶も日本における鉄砲生産の起源は、種子島への鉄砲伝来であると考えていたことは、先に見た「国友鉄砲記」や『国朝砲熳権輿録』から明白

である。

室町幕府第十二代將軍の足利義晴の管領であった細川晴元は、本願寺に対して「奔走頂いたおかげで種子島より鉄砲がこちらに到来した。誠に悦ばしい」と記した書状を送っている(宇田川武久『鉄砲と戦国合戦』(吉川弘文館))。この書状からは、鉄砲が未だ珍品で贈答品に使用されたことが知られるが、鉄砲が種子島から贈られてきたと記していることが重要だろう。本書は天文十八年(一五四九)のものと推定されているが、すでに室町幕府内において、種子島が日本における鉄砲生産・活用の先進地として意識されていた事実を読み取ることができる。

鉄砲の日本への伝来は、分散的・波状的であったにしても、天文十二年に種子島へ鉄砲が伝来した事実は、伝来当時から種子島氏や島津氏によって喧伝され、鉄砲伝来地と言えば種子島という常識が日本社会に植え付けられていったと考えられる。

実は、国友への鉄砲伝来についても、明確な時期はわからない。現在分かっている国友鉄砲の初見は、越前の朝倉氏の一門と推測される一源軒

宗秀が、出羽の武将下国氏(しもくに)に宛てた書状に、贈答品として「国友丸筒」と見える書状である(宇田川武久『新説 鉄砲伝来』など)。本書状は天文末年か永禄初年のものと考えられ、戦国大名浅井氏の治世下であることは間違いないが、それ以前の起源を物語る史料はない。後世、国友鍛冶の経営が軌道に乗ってくると、その起源を明確にする必要が生まれ、種子島への鉄砲伝来の翌年、国友へ鉄砲生産が命じられたとする先の「国友鉄砲記」の説明が生まれた。

鉄砲初伝地・種子島は「史実」

結論から言えば、種子島への鉄砲伝来は、日本への鉄砲伝来を象徴する出来事として、種子島家や島津家などによって象徴的に語られた「逸話」なのである。しかし、それは単なる「逸話」ではなく、「真実」を象徴的に示した「逸話」と言える。倭寇が複数回にわたり日本へ鉄砲を伝えたことも「真実」だろうが、それは記録には残らない。残らなければ、証明し得ないので「史実」とは言えない。種子島への鉄砲伝来は「逸話」であっても、「真実」に基づいて作られた以上、それは

「史実」と認識できるだろう。

それにも増して、種子島が日本への鉄砲伝来の地だと、江戸時代以来、国友鍛冶はじめ日本人が考えてきた事実は歴史的に重みがある。種子島は、日本への鉄砲伝来を象徴する場所として、伝来当初から考えられて来たのである。したがって、種子島への鉄砲伝来は、日本の歴史上の「史実」として否定されるものではない。つまり、倭寇による鉄砲伝来と、種子島への鉄砲伝来は、すべての歴史事象が記録として残らない以上、矛盾するものではない。両者は「真実」の両面を説いていると考えるのが自然だろう。

日本へ鉄砲を伝えたのは、日本のどこかに至った倭寇が先か、種子島に漂着したポルトガル人が先かは、今となつては分からない。わからない以上、記録に残った種子島こそが、日本における鉄砲初伝地なのである。

関西人の種子島感

北村 大輔
(長浜城歴史博物館副参事)

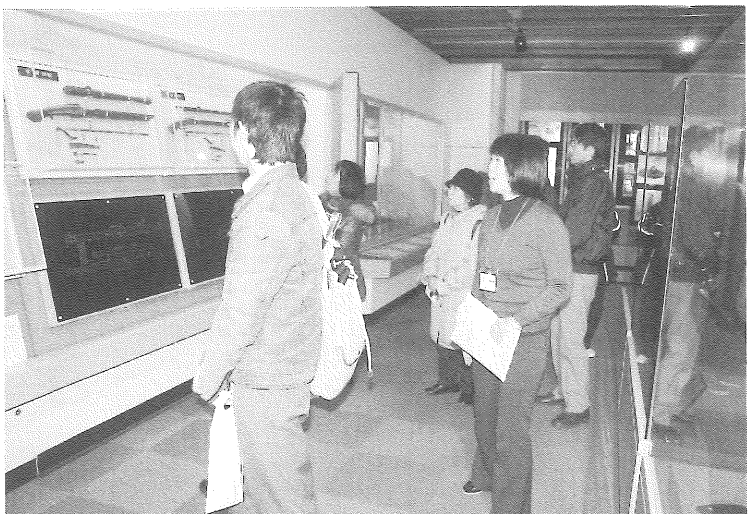
長浜城歴史博物館に来館されたあるお客様に田上さんのことをご紹介した。「長浜市と友好姉妹都市である種子島の西之表市から派遣交流職員として一年間長浜市で勤務いただいている田上美子です。」するとお客様は「以前は西表(いりおもて)って言っていたのいつから西之表(にしのおもて)に変わったの?」と田上さんに問う。田上さんはガツカリという表情を押し殺しながら、「西表(いりおもて)は沖縄県です。西之表は鹿児島県ですよ。」とやさしく説明していた。内心は、「なんで間違っの! あり得ない!」くらいのことを思っているだろうに……。

どうも私を含め関西地方の人間は、種子島ははるか遠い南方の島というイメージがあり、かつ「西之表」という字面から、あのヤマネコで有名な沖縄県八重山列島の西表島と混同している傾向にあるようだ。実際には、種子島は七世紀後半から当時の大和王権と交流を持ち始めているのであるから、もうかれこれ一三〇〇年以上のお付き

合いになる。そろそろ鹿児島県大隅半島のすぐ南に位置していることに気付かなければならないだろう。

ということ、種子島との交流序史を少し紐解いてみよう。当時の大和王権は天武天皇六年(六七七)の二月に、多禰嶋(種子島)からやって来た使者たちを飛鳥寺の西の槻(ケヤキのこと)の下で饗応している。当時、飛鳥寺の西には槻の大木があり、その下の広場は国家的重事において度々登場する。この場所は古代の人々にとって特別な意味のある土地であったようである。

この多禰嶋からの使節団の来朝を受けて、大和王権側も天武天皇八年(六七九)、倭馬銅部造(やまとのうまかいべのみやごころぞう)連(つら)らを使者として多禰嶋に派遣している。さらに天武天皇十年(六八一)には、多禰国から帰って来た使者が、多禰国の地図を持ち帰り、その上で多禰国の風土などを報告した。この報告によると、筑紫(九州)の南の海中にある多禰嶋の人たちは、髪の毛を短く切り、草の裳を着してい



長浜城で展示説明をする田上さん

るといふ。稲は常に豊に実り、一度植えれば、年に二度収穫することが出来る。産物はクチナシやイグサ、種々の海産物であるという。温暖な気候に自然の恵み豊かな土地柄は昔も今も変わらない。このような大和王権と多禰嶋との相互理解・相互交流は発展し、八世紀の初頭には、多禰嶋は大和王権の中に組み込まれていくことになる。

当時のヤマトの人たちが多禰嶋のことを深く知って以来一三〇〇有余年、現代の多禰嶋の使者「田上美子」は、長浜で何を見聞し、何を西之表市にもたらすのだろうか? 長浜城歴史博物館は、現代の槻の木の下での広場であつたのであろうか? こんなことを心配しながら、今後、田上さんを介した西之表市と長浜市との交流が益々発展することを祈りたい。

南島文化と民俗学

橋本 章
(長浜城歴史博物館学芸員)

名も知らぬ 遠き島より

流れ寄る 椰子の実一つ

故郷の岸を 離れて

汝はそも 波に幾月

これは有名な唱歌「椰子の実」の歌詞の一節である。作詞は島崎藤村(一八七二—一九四三)。藤村は親友の柳田國男(一八七五—一九六二)から、愛知県渥美半島の先端にある伊良湖岬でヤシの実が流れ着いていた様子の話を聞き、この詩を詠む着想を得たのだという。その後、昭和十一年(一九三六)になって、この詩には作曲家大中寅二によって曲がつけられ、七月には東海林太郎が歌いラジオで放送され、その年の十二月にはレコードに吹き込まれ人気を博した。

さて、柳田が伊良湖岬に滞在したのは、彼が東京帝国大学の二年であった明治三十一年(二八九八)の夏のことである。この時に柳田は、伊良湖岬の恋路ヶ浜を散策中に漂着したヤシの実

を見て、ヤシの木が茂るはるか南の島々から海に落ちたヤシの実が、黒潮にのって日本列島へと旅をし、伊良湖岬へと流れ着いたことから、日本民族の文化の源流が南西諸島にあるとの確信を持ったのだという。その後、柳田國男は日本民俗学を興し、文献資料に残りにくい庶民の生活文化を探究する道を模索し始めた。そして柳田は、晩年になって南島文化と日本本土との文化的な関連性についてまとめた『海上の道』を著し、日本文化への新たなまなざしを提起したのである。

柳田は、日本人の先祖が中国大陸南部から南西諸島を経由して列島に到ったものと想起し、その際に稲作を中心とする生業文化が伴われて渡来し、やがて日本全土に広まったと分析した。つまり、南島の文化に見られる祭祀の形態や生業の技術、そして思想の在り方こそが日本文化のルーツであると、柳田國男は考えたのである。昭和三十六年(一九六一)に刊行された『海上の道』に集約されたこの柳田の発想は、当時大きな反響

を呼び、日本文化の源泉を求める南島文化への憧憬の念を日本人の心に芽生えさせたのである。

しかし現在、柳田の論は必ずしも定説とはなり得ていない。それは、ひとつには『海上の道』が

執筆されたのが、日本が第二次世界大戦の敗戦後であったことと無関係ではない。戦後、南西諸島は大半が日本から切り離され米国の統治下に置かれていた。奄美群島や沖縄は日本ではなかったのである。柳田國男が『海上の道』に込めたものは、日本列島の文化が、はるか南の島々から黒潮によってもたらされたものであり、本土と南西諸島とは等しい文化で結ばれた同胞なのだという、強烈なメッセージであった。それは時代の産物であり、必ずしも学問的な裏付けを伴わないものであった。しかし、当時の人々は柳田の言説に感銘を受け、本土復帰は国民共通の大願となったのである。

唱歌「椰子の実」の最後には、次のような望郷の詩が詠われる。

思いやる 八重の汐々

いづれの日にか 国に帰らん



編集後記

私自身も毎朝、通勤のたびに「種ヶ島の紫イモ」という看板を見るたびに、モーさんの義憤を思い起こしてしまうでしょう。まだまだモーさんの思い出が私たちの周りには満載です。

この小誌は、私たちがモーさんとお付き合いした一年間の思い出や島に寄せる思い、彼女にかける期待などをそれぞれに綴ったものです。

「こんなん違うー!」と思うかもしれませんが、どうかその思いをくみ取っていただければ幸いです。

(中島誠一)

縁あって、田上美子さんと一年間いっしょに仕事をさせていただきました。田上さんが、長浜城歴史博物館の勤務を希望し、私たちといっしょに仕事ができることに感謝する意味で本書を企画しました。後半の文章は、長浜城歴史博物館の職員一人ひとりが、田上さんと共に過ごした一年間を思い出しながら書いたものです。田上さんが長浜市で活動したことは、単なる職員同士の交流にとどまるものではありません。西之表市と長浜市で行われている人事交流が両市の文化交流になっていることを、市民のみなさんに知ってもらえれば幸いです。

(山口優子)

執筆者(敬称略・執筆順)

田上 美子

中島 誠一

森岡 榮一

太田 浩司

北村 大輔

橋本 章

編集担当

山口 優子

田中 かつお

山崎 うらら

吉井 香織

澤村 優子

種子島からめっかりもーさん 種子島の歴史と民俗

2010年3月31日 初版1刷発行

編集 / 長浜市長浜城歴史博物館

企画・発行 / 長浜市長浜城歴史博物館

滋賀県長浜市公園町10-10

TEL. 0749-63-4611 〒 526-0065

印刷 / サンライズ出版株式会社



1 種子島って？



2 米のチカラ



3 皆既日食 —「月に一番近い島」・種子島—



4 八月の種子島



5 山の井様と松寿院



6 さつまいも（甘藷）にまつわるお話

7 芸能の島と願成就

8 来年もよい年でありますように

9 春を呼ぶ種子島の年中行事

10 黒糖今昔物語

11 鉄砲伝来をめぐる人々

